

平成二十五年二月二十三日(土)

第四三五回 史跡めぐり(バスツアー)

埼玉の英雄・畠山重忠の故郷と菅谷館跡
鉢形城跡・川の博物館

NPO 法人 越谷市郷土研究会

第四三五回 史跡めぐり（バスツアー）

埼玉の英雄・畠山重忠の故郷と菅谷館跡

鉢形城跡・川の博物館

- 日時 平成二十五年二月二十三日（土）雨天決行
- 集合 午前七時三十分 JR南越谷駅前（りそな銀行前）
- 参加費 六、〇〇〇円（バス代・入館料・食事代・資料代など）
- 案内者 常任理事 篠原陸郎

コース

南越谷駅→（外環・関越）→東松山IC

- 菅谷館跡・県立嵐山史跡の博物館（嵐山町）
- 鉢形城跡・同歴史館（寄居町）
- 昼食・県立川の博物館（寄居町）
- 畠山重忠公史跡公園（深谷市）
- 金鑽神社（神川町）
- 元三大師（神川町）

本庄児玉IC→（関越・外環）→

南越谷駅前帰着 18:30 予定

大里郡寄居町 ・ 人口約3万5千人
 ・ 市町施工 昭30年
 ・ (町名由来)
 「鉢形城落城後、甲州の侍・小田原浪士などにより集まりて居住せし故の名なり」という。
 又、戦国期に鉢形城左岸の城下町として人々が寄り集まった集落に由来する。

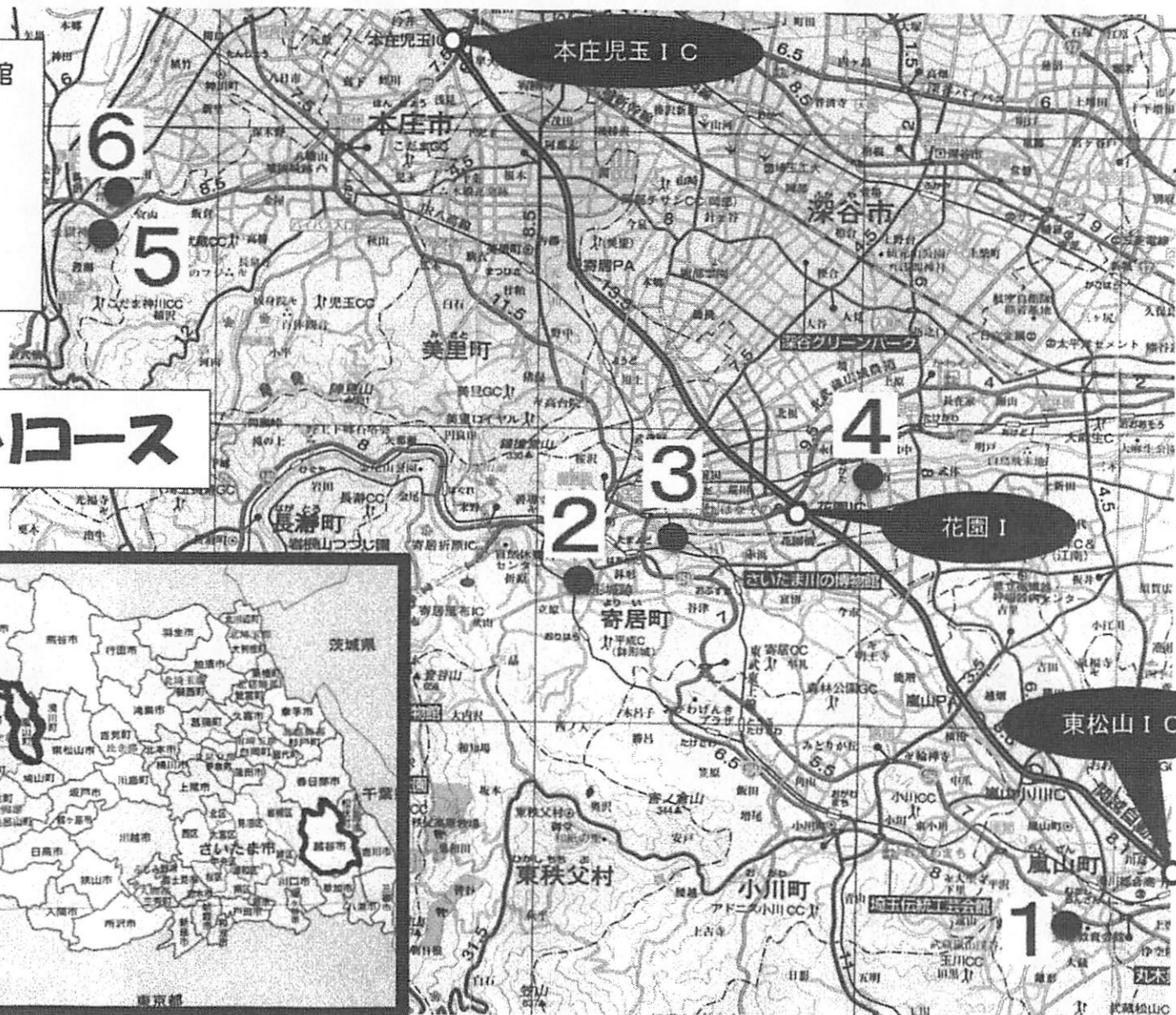
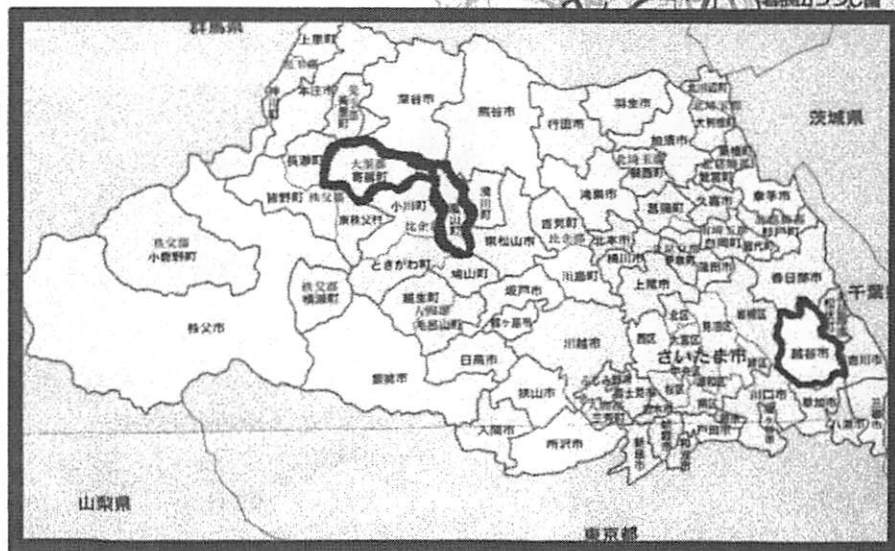
深谷市 ・ 人口約15万人
 ・ 市町施工 昭30年 平18年
 ・ (町名由来)
 台地の深い低湿地であることによる。
 深屋とも書き、中世南北朝から見える地名。

児玉郡神川町 ・ 人口約1万5千人
 ・ 市町施工 昭62年 平18年
 ・ (町名由来)
 (神川町) 武蔵7党の丹党、安保氏の拠点。
 (児玉郡) 養玉より起こったもので、古くから養蚕が盛んであったことを示す説。
 また碎銀を児玉というので、古くから銀・銅を産出したことによる説。

比企郡嵐山町 ・ 人口約2万人
 ・ 市町施工 昭42年
 ・ (町名由来)
 槻川(つきかわ)の景勝地を武蔵嵐山と称したことに由来。

- すがややかた
1 菅谷館跡・嵐山史跡の博物館
はちがた
2 鉢形城跡・同歴史館
3 川の博物館
はたけやましがただ
4 嵐山重忠公史跡公園
かなさな
5 金鑽神社
がんざん
6 元三大師

史跡めぐりコース



○ 菅谷館跡 (国指定史跡)

● 比企郡の「4比企城館跡群」(すべて国指定史跡)

- ・菅谷城 (嵐山)
- ・杉山城 (嵐山)
- ・松山城 (吉見町)
- ・小倉城 (ときがわ町)

● 菅谷館跡 (史跡の博物館資料より)

菅谷館跡は、鎌倉時代の有力御家人であった畠山重忠が文治3年(1187)以前に居住していたと伝えられている。現在までのところは、重忠時代の遺構は確認されていないが、館跡を含む周辺地域は菅谷と呼ばれ、古くから秩父平氏の流れをひく畠山氏の拠点があったと考えられている。館跡近くの平沢寺の中世寺院跡からは、重忠の曾祖父の秩父重綱銘のある経筒が出土しており、阿弥陀堂跡とみられる建物跡なども発見されている。このことから、平沢寺は畠山氏に関係する寺院であったと考えられている。また、元久2年(1205)に、畠山重忠が執権北条氏の謀略によって二俣川で討たれた際、「小倉郡菅谷館」を出発して鎌倉に向かったことが「吾妻鏡」に記されている。

その後、山内上杉氏と扇谷上杉氏が争った長享年中の大乱(1487~1505)の際には城郭として使われていたと考えられる。『松陰私語』(上野国新田荘の新田家純の顧問僧松陰が、十五世紀後半の享徳の乱の渦中をかくぐくってきた体験を記した回想録)によると、松陰という陣僧が「川越城に対し、須賀谷旧

城を再興して鉢形城の守りを固めるように」と進言したとあり「須賀谷旧城」が現在の菅谷館跡にあたると思われる。なお、現在遺る菅谷館跡で見られる土塁や堀などは戦国時代の遺構である。現在までに5回に及ぶ発掘調査が行われており、出土品の年代は十四世紀末から十六世紀のものが中心である。昭和四十八年五月、鎌倉時代の代表的な武蔵武士の館に起源をもつ中世城館の遺跡として国の史跡に指定され、平成二十年三月には「比企城館郡菅谷館跡」と「埼玉県立歴史資料館」から名称が変更された。

○ 埼玉県立嵐山史跡の博物館

鎌倉時代の武士の館(菅谷館)から戦国時代の城郭(須賀谷城)に変遷をとげた場所に立地していることから

- 1 中世の館や城郭
- 2 館の主であった畠山重忠をはじめとする武蔵武士
- 3 板碑(板石塔婆)・五輪塔・宝篋印塔などの中世石造物
- 4 中世寺院や寺院跡
- 5 窯跡など中世の生産遺跡
- 6 鎌倉街道上道などの中世古道を扱う

史跡系(考古系)の博物館。

・常設展示

菅谷館のあるじ畠山重忠、鎌倉時代の館跡や寺院跡、戦国時代の城郭跡、供養と埋葬などのテーマから、出土資料などを通して、中世の埼玉県域の歴史を再現している。

菅谷館跡の鳥瞰と曲輪全体

ちようかん



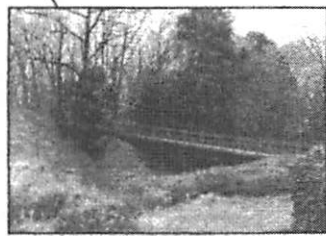
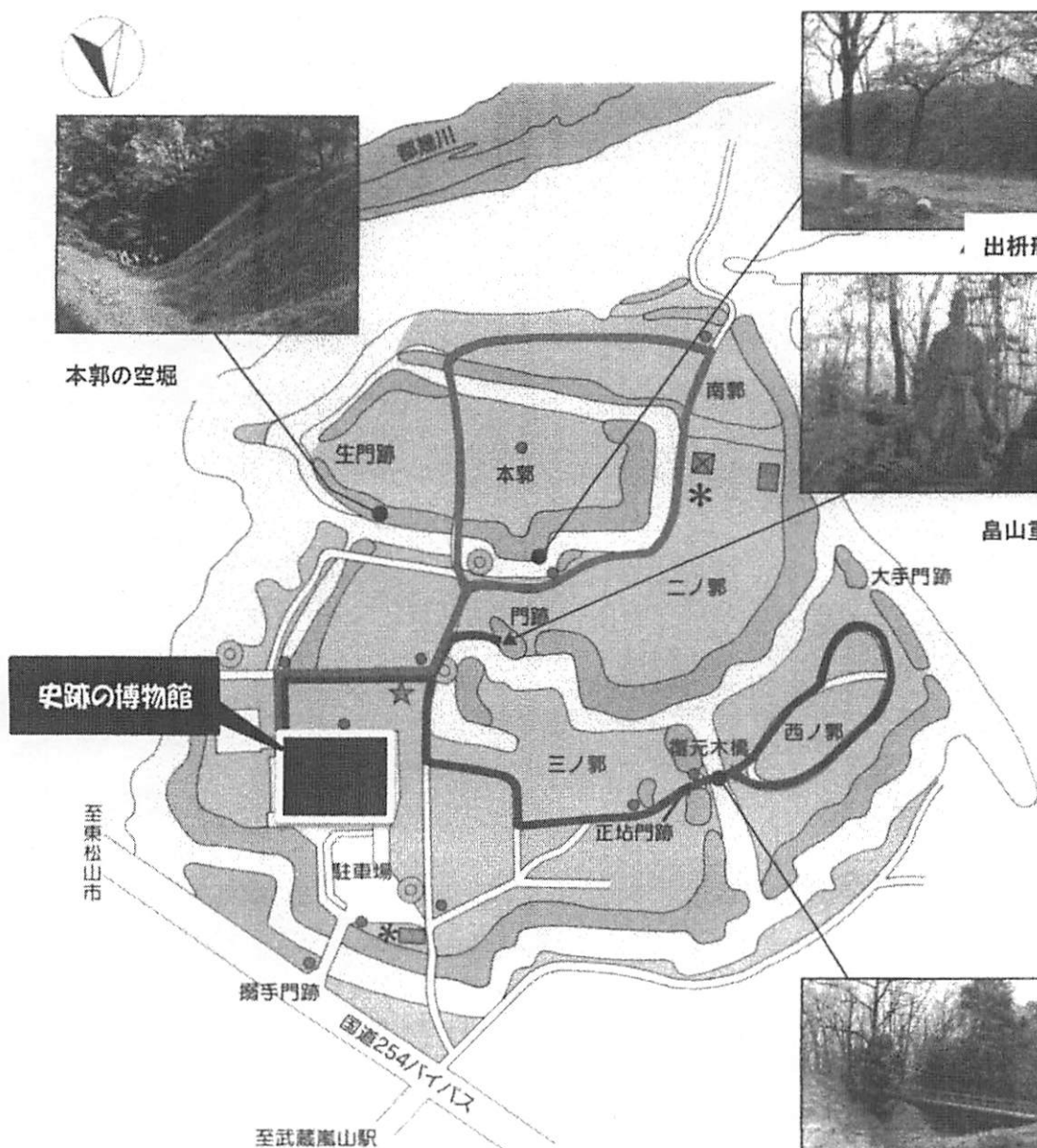
本郭の空堀



出柵形土塁



島山重忠像



▲三ノ郭から西ノ郭にかかる木橋 (復元)

はちがた
鉢形城 (昭和七年国指定史跡)



深沢川

荒川

鉢形城全景

鉢形城歴史館資料より

正喜橋

鉢形城周辺の城跡

- ・ **鉢形城跡** (寄居町)
 国指定
- ・ **花園城跡** (寄居町)
 県選定遺跡
 武蔵七党猪俣党の土豪藤田氏の居城
- ・ **花園御岳城跡** (寄居町)
 文献資料はない
- ・ **金尾要害山城跡** (寄居町)
- ・ **用土城跡** (寄居町)
 後世に建てた石碑のみ
- ・ **天神山城跡** (長瀨町)
 武蔵七党猪俣党の土豪藤田氏の居城
 後、北条氏邦の居城
- ・ **猪俣城跡** (美里町)
 猪俣氏の居城
 北条家臣猪俣範直が名胡桃城を攻略したため、秀吉の小田原征伐に口実を与えてしまったことは有名
- ・ **円良田城跡**
 花園城の支城

・ 鉢形城跡は、戦国時代の代表的な城郭跡として、昭和七年に国指定史跡となった。城の中心部は、荒川と深沢川に挟まれた断崖絶壁の上に築かれていて、天然の要害をなしている。この地は、交通の要衝に当たり、上州や信州方面を望む重要な地点であった。

・ 鉢形城は、文明八年(1476) 関東管領であった山内上杉氏の家宰(江戸時代の筆頭家老に相当)長尾景春が築城したと伝えられている。後に、この地域の豪族藤田康邦に入婿した、小田原の北条氏康の四男氏邦が整備拡充し、現在の大きさとなった。関東地方において有数の規模を誇る鉢形城は、北関東支配の拠点として、さらに甲斐・信濃からの侵攻への備えとして重要な役割を担った。

・ 天正十八年(1590)の豊臣秀吉による小田原攻めの際には、後北条氏の重要な支城として、前田利家・上杉景勝等の北国軍に包囲され、攻防戦が展開された。一ヶ月余りに及ぶ籠城の後、北条氏邦は、六月一四日に至り、城兵の助命を条件に開城した。

・ 開城後は、徳川家康の関東入国に伴い、家康配下の成瀬正一・日下部定好が代官となり、この地を統治した。

○ 鉢形城の歴史

はちがた

鉢形城の城主

① 長尾景春 (築城) ↓ ② 山内上杉顕定 ↓ ③ 北条氏邦 ↓ (廃城)

① 鉢形城と長尾景春の乱

- ・ 文明八年 (1476) 6月、関東管領山内上杉顕定の家臣である長尾景春が鉢形城を拠点として顕定に叛く (長尾景春の乱)。これは主君の家宰職 (江戸時代の筆頭家老に相当) を父の死後、叔父に取られたことによる恨みから端を発した。相模・武蔵各地で景春党が蜂起する。
- ・ その後、扇谷上杉定正の家宰太田道灌が各地の景春党を鎮圧し、さらに用土原で景春軍を破る。
- ・ 文明一〇年 (1478) 7月、ついに鉢形城は攻略され、山内上杉顕定が入城する。景春は秩父に逃れるが、太田道灌により攻略され、乱は終息する。

② 鉢形城と山内上杉氏 (両上杉氏の対立)

- ・ 鉢形城主となった山内上杉氏は、川越城を拠点に台頭してきた扇谷上杉定正と対立する。
- ・ そして長尾景春の乱平定で名を上げた太田道灌により定正側の勢力が拡大することを恐れ、文明一八年 (1486) 7月讒言をもって道灌を定正に謀殺させたといわれている。
- ・ 長享二年 (1488) 両上杉氏「須賀谷原」の戦い。
- ・ 明応三年 (1494) 両上杉氏「高見原」の戦い。
- ・ その後、新たに関東に後北条氏 (初代早雲) が進出してくる。
- ・ そこで後北条氏を前に、両上杉氏は連合を余儀なくされる。

③ 鉢形城と後北条氏邦

- ・ 天文一五年 (1546)、山内上杉氏と扇谷上杉氏の連合軍は北条家三代北条氏康と川越において衝突し、両上杉軍は大敗北を喫することになる。(世に言う「川越夜戦」)
- ・ 在地の豪族であり、山内上杉氏の家老である藤田氏 (武蔵七党の猪俣党の系譜) は、川越夜戦の大敗北後、藤田康邦の娘を北条氏康の代四子氏邦に娶らせ、家督をゆずる。
- ・ 北条氏邦は秩父地方を勢力圏に治めた後、上野進出の拠点として、関東管領の居城であった鉢形城を永祿三年 (1560) 頃居城とし、支配領の中心とした。
- ・ 関東をめぐる北条の対上杉・武田・秀吉

 - 1 上杉氏と同盟 (氏邦の弟、謙信の養子になる)
 - 2 武田氏と同盟 (武田氏の強力な侵攻に悩まされ)
 - 3 徳川氏と同盟 (謙信の死による上杉氏の後継者争い、武田氏の滅亡、本能寺の変による信長の死などにより、氏邦の上野国の支配及び北条氏の関東領国への邁進)
 - 4 小田原征伐 (天正一八年 (1590)、秀吉の空前絶後の25万による小田原征伐)

 - ・ 鉢形城 前田利家・上杉景勝・本多忠勝・真田真幸らに包囲され、氏邦は3千5百の軍勢とともに籠城するが、家臣らの助命嘆願で開城する。
 - ・ 氏邦 前田利家に預けられ、慶長二年 (1597) に金沢に没す。墓は寄居町の正龍寺。
 - ・ 鉢形城 廃城となり、徳川氏の家来の支配地となる。

●上杉氏のプロフィール

・出自 藤原氏

・祖(重房)が丹波国(京都・兵庫)上杉荘を領として 上杉氏と称する。

・鎌倉時代の建長4年(1252)、関東に移る。

・祖の孫娘が足利氏に嫁し、足利尊氏を生んだことにより、一族が重用される。

・その後、上野・越後・伊豆の守護家となり4家に分れ、特に山内上杉氏・扇谷上杉氏の2家が交互に関東管領職を務め、関東の実権を握る。

・その後、山内上杉氏と扇谷上杉氏は、互いに争うようになり、やがて関東は分裂する。そして実権は両家のそれぞれの家宰、山内上杉氏の長尾氏、扇谷上杉氏の太田氏(太田道灌など)に移る。

・天文15年(1546)、川越戦争で扇谷上杉氏が滅亡し、山内上杉氏は越後の長尾景虎(謙信)を頼り、関東管領職と上杉の姓を謙信に譲る。

・以後、謙信は関東管領上杉氏の名目で関東支配をめざすが、北条氏の台頭で果たせなかった。

・江戸時代に入ると、上杉氏(謙信の系列)は会津・米沢と国替えした。

●長尾氏のプロフィール

・出自 桓武天皇

・相模国「長尾」に住したので長尾氏と称する。

・鎌倉時代末期上杉氏に仕え、室町時代には山内上杉氏の家宰(江戸時代の筆頭家老と同じ)となり、上野・下野・上総・越後の各地に一族

が分布した。

・特に越後府中を本拠とした長尾氏は、越後守護代として主家(上杉氏)

をしのぐ勢力を有したが、能景の次男為景は、永正4年(1507)

守護上杉房能を、次いで上杉顕定を殺して越後一国を手中に収めた。

・為景の死後、長男晴景と景虎(謙信)とが対立したが守護上杉定実の

調停によって謙信が守護代を継いだ。

・その後、謙信は越後に逃れて来た山内憲政から関東管領と上杉姓を譲

られ、以後、上杉謙信と名乗る。

・上杉氏と名を改めた長尾氏は、以後越後の戦国大名としてその名をとどろかせ、江戸時代には会津・米沢と国替えした。

12頁「重忠節」の歌詞

重忠節

作詞 畑やわら
作曲 細川潤
唄 三橋美智也

三 雪の吉野の 生き別れ
恋し 義経 いまいずこ
静の舞いの 哀れさに
なみだでつや 銅拍子

一、国は 武蔵の 畠山
武者と生まれて 描く虹
剛勇かおる 重忠に
いざ鎌倉の ときいたる

四 頼み難きは 世の常か
誠一途が 謀叛とは
うらみも深く 二俣に
もののふの意地 花と散る

二 平家追い討つ 一の谷
愛馬三日月 背に負えば
そのやさしさに 馬も泣く
ひよどり越えの 逆落とし

五 仰ぐ秩父に 星移り
菅谷館は 苦むせど
坂東武者の かがみぞと
おもかけ照らす 峯の月

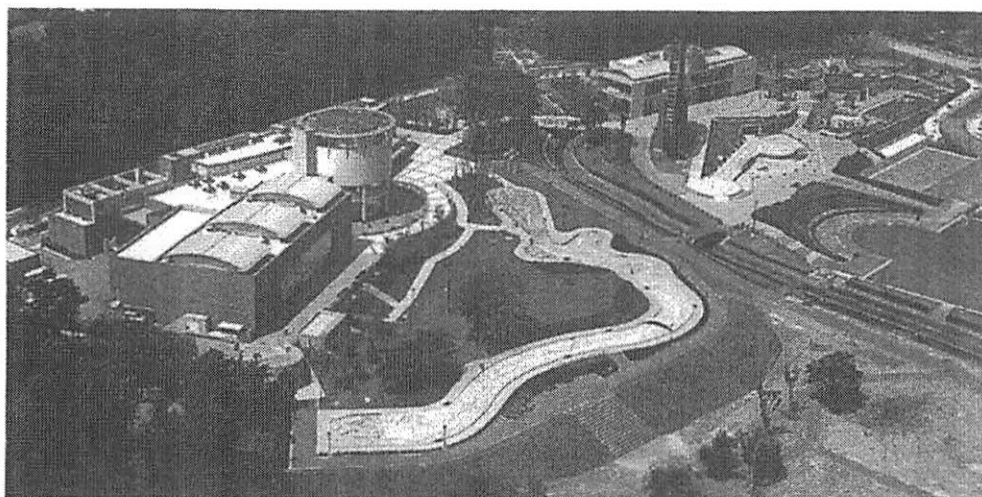
鉢形城に関する年表

鉢形城歴史館資料より

西暦	和暦	鉢形城関連事件	主な事項・その他
1467	応仁元		応仁の乱。(1467～1477)
1476	文明 8	長尾景春、鉢形城で上杉氏に反抗する。	
1477	文明 9	太田道灌、長尾景春を用土原の戦いで破る。	
1478	文明10	太田道灌、長尾景春を鉢形城にて破り、上杉顕定が鉢形城に入る。	
1488	長享 2	上杉顕定、高見原へ出陣し、上杉定正と戦う(高見原合戦)。 万里集九、鉢形城訪問。	
1493	明応 2		北条早雲、伊豆平定。
1494	明応 3	上杉顕定、鉢形城から高見原へ出陣し、上杉定正・北条早雲らと戦う(高見原合戦)。	
1495	明応 4		北条早雲、小田原城を奪い取る。
1506	永正 3		早雲寺殿十七箇条制定。
1509	永正 6	連歌師宗長、鉢形城へ立ち寄る。	
1510	永正 7	古河公方・足利成氏の弟・顕実が顕定の遺言により山内上杉家を継いで武蔵鉢形城(寄居町)に入る。	関東管領山内上杉顕定が長尾為景と戦って討死。
1512	永正 9	6月 上杉憲房・長尾景長・横瀬国経が武蔵鉢形城を攻め、上杉顕実を常陸国古河に追う。	
1521	永正17		北条早雲、没。
1524	大永 4	10月・上杉憲房は江戸城奪回のため武蔵国毛呂(毛呂山町)を攻め、天神山(長瀬町)城主・藤田康邦らの仲裁で和議によって収める。	北条氏綱が江戸城を奪取。
1537	天文 6		北条氏綱、河越城を奪取。
1541	天文10	この頃北条氏邦生まれる。(10年説)	北条氏綱没、氏康家督を継ぐ。
1543	天文12	この頃北条氏邦生まれる。(12年説)	種子島に鉄砲が伝わる。
1546	天文15		北条氏康、河越城にて古河公方・両上杉軍を破る(河越夜戦)。 山内上杉憲政、越後へ退去。
1552	天文21		相甲駿三國同盟成立。
1554	天文23		桶狭間の戦い。
1560	永禄 3	このころ、北条氏邦鉢形城主となる。	上杉謙信、関東管領就任。
1561	永禄 4	上杉謙信、小田原城を攻める。	
1562	永禄 5	氏邦、上尾の駅にて上杉謙信と戦う。	
1568	永禄11	北条氏邦、小園・宋野で検地を実施。	織田信長、入京。相甲駿三國同盟破綻。
1569	永禄12	越相同盟成立、武田軍鉢形城を攻撃。三増合戦にて武田軍に氏照・氏邦軍敗れる。	
1571	元龜 2		氏康没、越相同盟破綻。
1573	元龜 4		武田信玄、没。
1574	天正 2	上杉謙信、鉢形城周辺に放火。	
1575	天正 3		長篠の戦い。
1578	天正 6	氏邦、沼田城を攻略。	上杉謙信、没。
1582	天正10	北条軍、織田軍の滝川一益と神流川にて戦う。(神流川合戦) 氏邦、箕輪城主となる。	武田氏滅亡。 本能寺の変。
1583	天正11	北条氏、徳川氏と同盟。	
1584	天正12	氏邦、上野国金山城の由良国繁を攻める。	小牧・長久手の合戦。
1585	天正13	徳川軍、真田昌幸の上田城を攻めるも落とせず。 氏邦、沼田城を攻めるも落とせず。	秀吉、関白就任。
1586	天正14	氏邦、北条姓に復する。	徳川家康、豊臣秀吉に臣下の礼をとる。 秀吉、関東惣無事令を発す。
1587	天正15		豊臣秀吉、九州平定。
1589	天正17	猪俣範直、名胡桃城奪取。	
1590	天正18	豊臣軍の前田利家・上杉景勝の攻撃により鉢形城開城。	小田原征伐。
1597	慶長 2	北条氏邦、金沢で没。	

○ 埼玉県立川の博物館

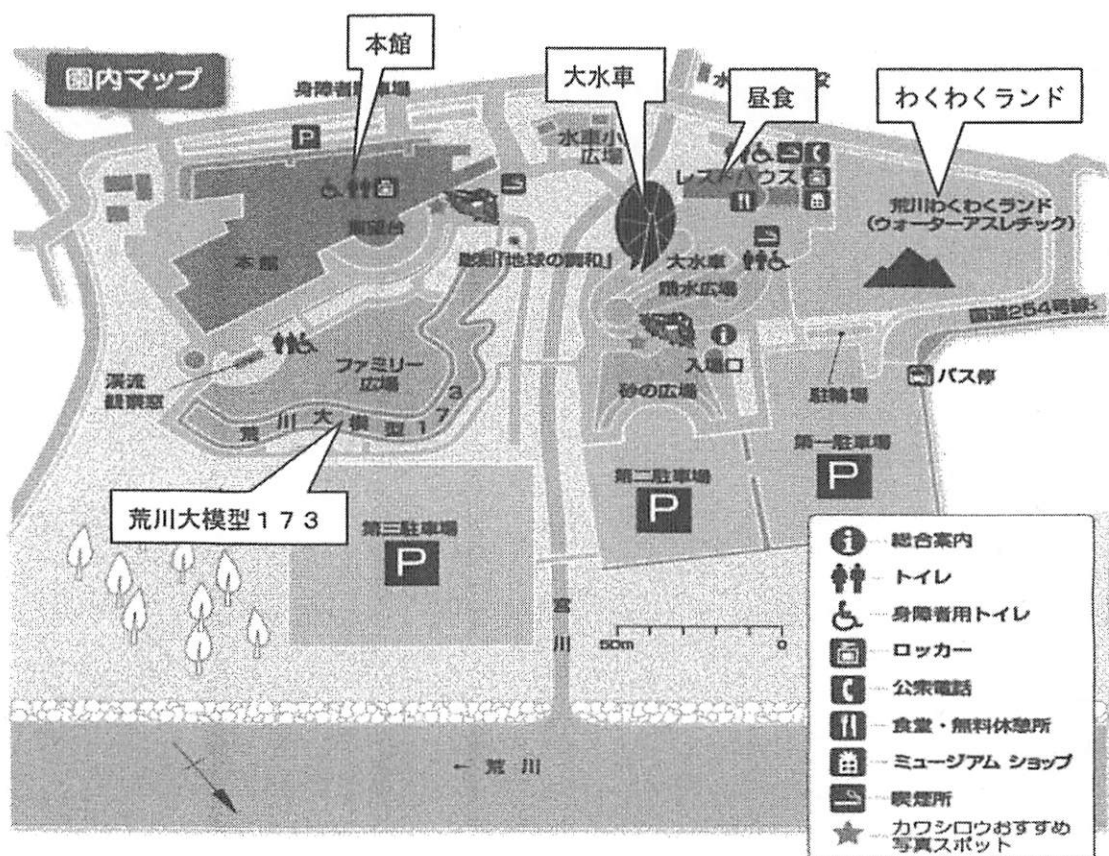
● かわはく概要



・昭和六一年より一〇年余りの準備期間を経て、平成九年に開館した。

・平成十八年より、県立博物館の再編にともない、「埼玉県立川の博物館」となり、長瀬町にある、「埼玉県立自然の博物館」と一体になった「埼玉県立自然と川の博物館」として再出発。

・館の目的は、「埼玉の母なる川―荒川を中心とする河川や水と人々のくらしとのかわり」を様々な体験学習を通して理解し、環境保護についても、河川の浄化や水循環の視点から身近な問題としてとらえることを目的とする。



●荒川の概要

・長さ 17 km。全国で15番目の長さ。

・流域面積 2940 km²。全国で19番目の広さ。その内埼玉県内は3分の2。

・支川・派川 支流(二級河川)は120以上。一番長い支流は入間川。

・一級河川 一級河川Ⅱ国指定の河川

二級河川Ⅱ都道府県指定の河川

準用河川Ⅱ市町村指定の河川

・名前の由来 荒川の名前が初めて文献に現れるのは、鎌倉時代末にできた「宴曲抄」えんきょしょう。場所は、鎌倉街道が荒川を渡る「赤浜の渡し」付近(現寄居町)。

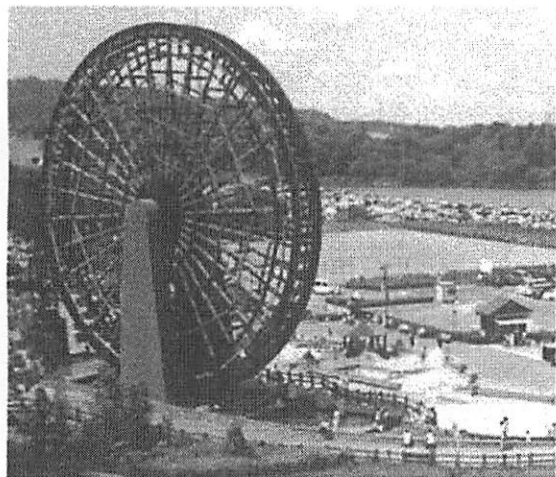
●日本最大級の大水車

・水車の形式 胸掛け水車

・水輪の直径 23、0 m

・水輪の幅 2、1 m

開館以来、日本一の大きさを誇ってきたが、2004年に岐阜県で直径24 mの水車が完成し、日本第二位の大きさとなった。



●日本一の大模型「荒川大模型173」

屋外の精密地形模型としては日本一。

荒川本流に沿った地形を、1000分の1に精密に縮小した模型。

「173」は、一級河川荒川の長さだが、173 kmであることからつけられたもの。

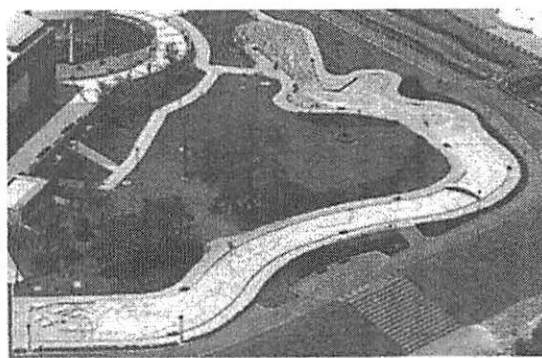
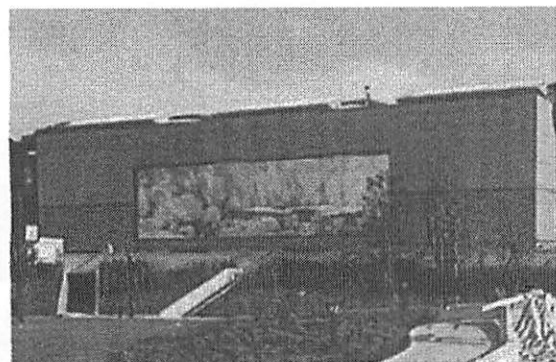
ボタン操作で、ダムや水門を開閉できるようにになっている。

●日本一の大きさの「美術陶板」

屋外に展示した日本画の大型美術陶板としては日本一の大きさ。

本館外壁に、日本画家「川合玉堂」の筆になる重要文化財「行く春」を、長さ21.6 m、高さ5.04 mの大陶板画(信楽焼)にして展示してある。

大正2年に長瀬方面を訪れた玉堂が、荒川に浮ぶ船車をモチーフに描いた傑作である



○ 畠山重忠公史跡公園

鎌倉時代の関東武士を代表する武将である畠山重忠公は、長寛二年（一一六四）秩父庄司重能の二男として、現在のこの地の畠山館やまたに生まれ、幼名を氏王丸と言ひ、後に畠山庄司次郎重忠となった。

剛勇にして文武両道にすぐれ、源頼朝に仕えて礼節の誉れ高く、県北一帯の支配のみならず、伊勢国沼田御厨みくりや（三重県）・奥州葛岡くすおか（岩手県）の地頭職を兼ね、鎌倉武士の鑑として尊敬されたが、頼朝なきあと北条氏に謀られて、文久二年（一一〇五）、二俣川（横浜）にて一族とともに討たれた。時に重忠四十二歳、子重秀は二十三歳であった。この畠山館跡には、重忠公主従の墓として六基の五輪塔がある。

また、館跡には嘉元二年（一一〇四）の紀年号のある、百回忌供養の板石塔婆、芭蕉句碑や畑和（元崎 玉



県知事）作詞による重忠節の歌碑などがあり、館の東北方には重忠産湯の井戸などもあって、通称「重忠様」と呼ばれて慕われ、現在は、この地一帯が重忠公史跡公園として整備されている。

*1 庄司しょうじ 荘園で、領主の命を受け年貢の徴収・上納、治安維持などの任務にあたった者。中央の領主から派遣される場合と地方の有力者が任命される場合とがあった。荘官。江戸時代、村役人の長。

・このように埼玉県ゆかりの人物で、鎌倉幕府に仕え、源頼朝の右腕として手腕を発揮した重忠の活躍ぶりは、鎌倉幕府が編纂した歴史書「吾妻鑑」や軍記物語「平家物語」などからうかがうことが出来、逸話も全国に残されている。

・しかし重忠にまつわる伝承の中には明らかに史実とことなるものも見受けられる。八〇〇年以上前の人物であること、北条氏に滅ぼされて資料が散逸してしまったことなどから、わからないところも多くある。

・菅谷館跡（博物館の建つ「国指定史跡」）現在の深谷市畠山で生まれた畠山重忠はその後、寄居町隣の嵐山町の菅谷に館を構えたといわれている。重忠はこの菅谷館から鎌倉に出陣している。

武蔵武士

（平11、田代修埼玉大教授）

- 1 畠山氏・河越氏に代表される秩父氏一族から分れた豪族的武士。
- 2 武蔵七党に属する中小規模の武士
村山党・丹党・猪俣党・西党・児玉党・野与党
「党」とは、血縁的なつながりを通してゆるやかな同族的な結びつきをもっている集団。
- 3 1, 2に属さない熊谷党・比企党などの武士。

●一の谷合戦「鴨越」の場面

銅像は畠山重忠が一の谷で愛馬「三日月」を背負って鴨越を下りたという大変有名な場面。

・この難所をほんとうに重忠は馬を背負って下りたか

・義経軍二万騎の内、鴨越に向かったのはたった七十騎であり、その中に重忠はほんとうにいたのか。

・「吾妻鏡」では、重忠は大手軍の大將範頼に従ったとあり、鴨越はもちろん、義経軍にもいなかったことになる。

・「平家物語」には、搦手（敵の背後攻め）の大將義経に従ったとしているが、鴨越の場面に重忠の名前はなく、馬を背負った話も記していない。

・この話が登場するのは、「平家物語」の異本「源平盛衰記」だけで、重忠の所屬についても「範頼を大將の器ではないと見限った重忠が、義経の軍に乗り換えた」と記されている。

・一方、「吾妻鏡」や「平家物語」には、「重忠の家臣が平師盛（清盛の孫）を討ち取り、それが安田義定の手柄となった」という記事がある。このことから、重忠主従が属していたのは鴨越に向かった義経軍ではなく、安田義定らが率いる搦手の本隊であった可能性が高いといえる。

・このことから、今日では、重忠が鴨越で愛馬を背負って下りたという話は、重忠の怪力ぶりと心根の優しさを物語るために、後世に創作されたものと考えられるようになっている。



愛馬「三日月」を背負う

●芭蕉句碑

むかしきけ

秩父殿さえ

すまふとり



芭蕉句碑

●板石塔婆（昭三十九年市指定）

・主尊は三弁宝珠阿弥陀一尊・種子（キリーク）

・記年銘嘉元二年甲辰（一三〇四）卯月（四月）九日

・周辺に彫られている文字は、梵字の光明真言である。

・畠山重忠公が元久二年（一二〇五）六月二十二日、横浜二俣川で戦死の後、百年忌に当たって供養のため建立されたものと伝えられる。



板石塔婆

●重忠産湯の井戸

・井戸については「新編武蔵風土記稿」に記されているが、産湯か否かは定かでない。

・またこの井戸は、江戸時代の記録に残された古井戸二ヶ所のうちの一つであると・・・。



重忠産湯の井戸

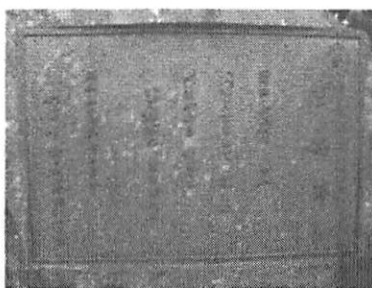
●重忠節歌碑

歌碑裏面

『この地に生まれ、誠実・剛勇・礼節の武将に仰がれた人柄に感動した埼玉県前々知事畑和（はたやわら）は、昭和五十二年、波乱に富んだ一生を重忠節として作詞し、作曲を細川潤一（古城など作曲）に依頼、歌手三橋美智也によって発表され、広く全国に重忠の名を広めた。これを記念し、永く後の世まで歌い継がれることを願ってこの歌碑をたてた。』

昭和五十四年

重忠節歌碑



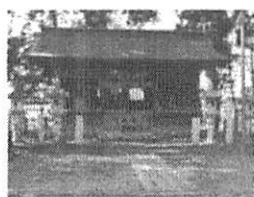
重忠節

国は 武蔵の 畠山
武者と生まれて 描く虹
剛勇かおる 重忠に
いざ鎌倉の ときいたる

昭和五十四年七月二十二日
作詞者 埼玉県知事畑和書

「重忠節」1番の歌詞
(全歌詞は6頁に掲載)

●畠山重忠と家人の五輪塔



正面：重忠の五輪塔

○ 畠山重忠の歴史

●重忠誕生前の背景

・平安時代中期ころから武蔵国の国衙（役所）の在庁官人を務め、武蔵国内で大きな勢力を誇っていた。畠山氏はその秩父氏の一族である。
・その後勢力拡張をはかる秩父氏は、久寿二年（一一五五）大蔵合戦で源義朝（頼朝の父）・源義平（悪源太・頼朝の兄）らの軍勢に敗れ、武蔵国の武士団の多くは源義朝の配下に入る。

・この後、武蔵国の武士団は、保元の乱（一一五六）・平治の乱（一一五九）において、源義朝のもとで戦ったが、平清盛に敗れ多くは平氏の支配下におかれることとなり、以後平氏の時代となる。

●またまた平氏配下から源氏配下に

・重忠は平氏全盛の時代に生まれ、清盛は太政大臣・天皇の外祖父と頂点に達する時代となる。

・平氏配下で上洛中の父に対し、重忠は畠山館の留守を任されていた。

・治承四年（一一八〇）源頼朝が平氏打倒を掲げて挙兵すると、各地の武士は再び平氏・源氏いずれに味方するか判断を迫られる。

・秩父平氏の系譜をひき、平氏に仕えてきた畠山氏は、当然の選択として重忠は平氏に味方したが、頼朝の武蔵国の勢力拡大と帰属呼びかけに対し、河越重頼・江戸重長とともに頼朝に従うこととなったと「吾妻鑑」にある。

●源平争乱

・治承四年（一一八〇）から五年にわたる、「治承・寿永の乱」で重忠は頼朝に先陣を命ぜられる。

・重忠が先陣をつとめた理由。

「源平盛衰記」によると、平氏の出であるのに、源氏の旗である「白旗」を持つているので頼朝が咎めたところ、重忠は「白旗は先祖武綱が源義家（八幡太郎）からたまたまったもので、この旗をかかげて先陣をつとめ、奥州征伐で軍功をあげた由緒ある旗である」と答えて、頼朝を感激させたと記されている。

●一の谷の戦い「鴨越」で活躍

・鴨越は一の谷の裏山で、平氏の陣を真下に見下ろす断崖絶壁で、義経以下、急な斜面を馬とともに降りることになかなか決心がつかなかったといわれるこの難所を、重忠は「愛三日月を背負って下りた」という逸話は大変有名である。この話の真相は六頁に記す。

●壇ノ浦の戦い・平氏滅亡

・文治元年（一一八五）、ついに平氏は壇ノ浦で最後をとげるが、この戦いで「平家物語」は、那須与一による扇的の逸話（屋島の戦いで海上に舟を浮かべた平家の軍勢が、小舟の竿に旭日の扇を掲げて漕ぎ出したのを見て、義経の命令でこれを弓で射落とした）を残している。しかし「源平盛衰記」には、最初に平氏の扇的の射るように命じられたのは重忠であり重忠は固辞し那須与一を推薦したと記されている。

●鎌倉幕府における活躍

・幕府の御家人として、幕府の公式行事への列席や頼朝の寺社参詣への随行など実績を積み重ねていく。
・重忠の邸宅は諸説あるが、国許の菅谷館すがやかたのほか、現在石碑のある鎌倉の邸宅が「新編相模風土記」に記されている。
・義経をかくまった藤原氏討伐の奥州合戦で、重忠は軍勢の先頭にた

つ先陣という名誉な役割をつとめている。

●音曲・今様の才能と怪力の持ち主

・義経の恋人「静御前」は、頼朝から奥州への逃避行で、捕えられ鎌倉に連行される。そして頼朝から命じられ、鶴岡八幡宮で舞を披露したときに、重忠は銅拍子どうびょうし（小さなシンバルのようなもの）という楽器を演奏している。

・また鶴岡八幡宮で雅楽が催されたとき今様という歌謡を披露している。

・「吾妻鏡」に、庭石となる大石をひとり運んだと記されている。

・「古今著聞集」に、御前相撲で関東一の力士の肩の骨を砕いたという話が残されている。

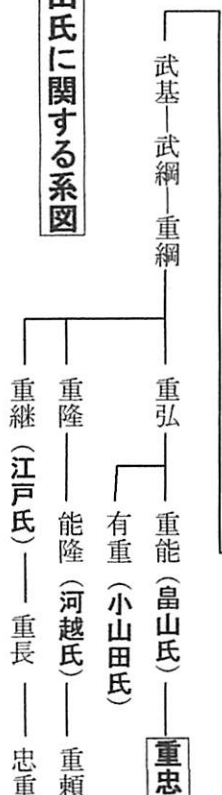
●非業の死

・源氏三代將軍実朝のあと、北条氏が鎌倉幕府の執権となり、武蔵武士発祥の地・武蔵国を掌握するには、武蔵国に古くから勢力をもつ畠山氏の存在は、脅威であり邪魔であった。

・「吾妻鏡」に記す「重忠の息子と北条方の平賀朝雅が口論となり謀反を企てた」との事をきっかけに、無実の罪を着せられ、横浜の二俣川で非業の死をとげる。二俣川周辺には重忠の首塚など史跡が多い。

恒武平氏・・・平良文—忠頼—将恒（秩父氏）

畠山氏に関する系図



畠山重忠関係略年表

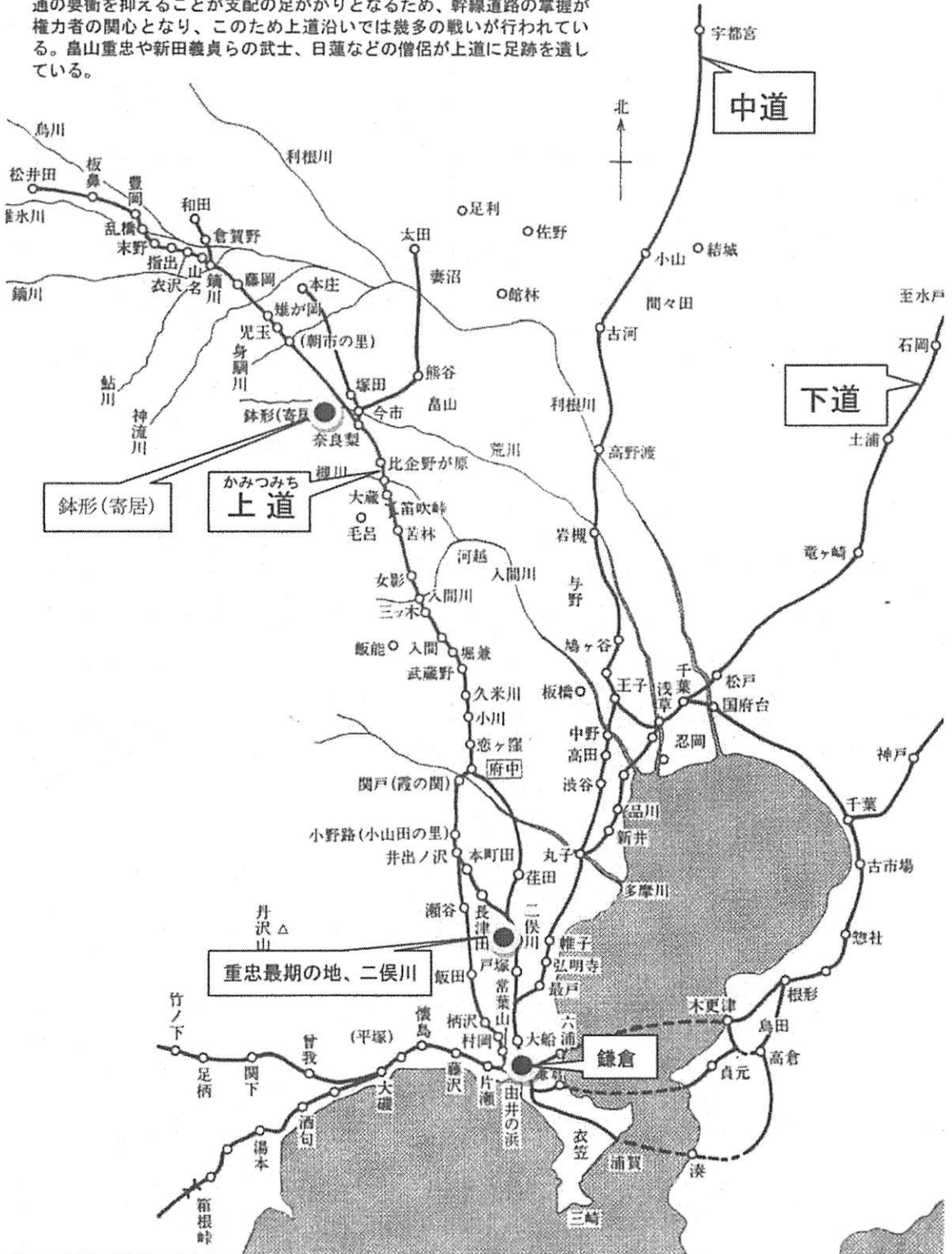
埼玉県立嵐山史跡の博物館より

年(西暦)	月・日	できごと
長寛2年(1164)		<u>重忠、武蔵国男衾郡畠山館(現深谷市畠山)に生まれる。</u> 父は畠山重能、母は三浦義明の娘。幼名を氏王丸という。
治承4年(1180)	7.	畠山重能、小山田有重の兄弟、京都大番役のため上洛。
	8.17	源頼朝、伊豆で挙兵。
	8.24	重忠、平氏方として鎌倉由比ヶ浜で三浦義澄と合戦。
	8.26	重忠、河越重頼、江戸重長らと三浦氏の居城衣笠城を攻め落とす。三浦義明自刃。
	10.4	重忠、長井の渡して河越重頼、江戸重長らとともに、頼朝と参会し、従う。
	10.6	<u>頼朝、平氏討伐のため鎌倉に向け発つ。重忠先陣をつとめる。</u>
寿永2年(1183)	7.	畠山重能・小山田有重ら平宗盛より暇をうける。
元暦元年(1184)	1.20	宇治川の戦いで、重忠、丹党以下500騎で川を渡る。
		重忠、六条河原で源義仲と戦う。
		源義仲、近江国栗津(現滋賀県大津市)で討死。
	2.5	<u>重忠、一の谷の合戦で活躍。</u>
	11.6	鶴岡八幡宮別当坊で音曲あり、重忠は今様を歌う。
文治元年(1185)	3.24	平氏、堀ノ浦にて滅亡する。
2年(1186)	4.7	<u>静御前、鶴岡八幡宮で舞を舞う。重忠、銅拍子で伴奏する。</u>
3年(1187)	6.29	伊勢国沼田御厨の代官が濫防。地頭である重忠が訴えられる。
	9.27	沼田御厨を没収され、重忠、囚人として千葉胤正に預けられる。
	10.4	千葉胤正の仲介により許され、重忠、武蔵国に帰る。
	11.15	梶原景時、重忠に謀反の意ありと頼朝に讒言する。
	11.21	下河原行平、重忠を伴い鎌倉へ帰る。重忠、起請文を書くようにいわれるも拒否。
4年(1188)	4.9	源義経追捕の院宣がでる。
5年(1189)	閏4.30	源義経、奥州衣川館で自害。奥州合戦始まる。
	8.10	重忠、阿津賀志山(現福島県伊達郡国見町)の合戦で藤原国衡を討ち取る。
	9.20	重忠、勲功の賞として陸奥国葛岡郡(現宮城県大崎市)を与えられる。
建久元年(1190)	10.2	頼朝、上洛。重忠、上洛の先陣を命じられる。
3年(1192)	9.11	重忠、永福寺庭池の大石をひとりで運び据える。
	7.12	頼朝、征夷大將軍に任じられる。
4年(1193)	2.9	重忠、頼朝から丹党と児玉党の諍いの仲裁を命じられる。
	5.8	重忠ら、頼朝に従って富士野の狩に赴く。
	5.29	曾我兄弟の尋問が行われる。重忠、尋問の座に列席する。
6年(1195)	2.14	頼朝、東大寺供養のため上洛。重忠、先陣をつとめる。
	4.5	重忠、梶尾(現京都府京都市)で明恵上人に会い、教えを乞う。
正治元年(1199)	1.13	<u>頼朝、死去(53歳)。重忠、嫡子頼家のことを託される。</u>
	10.28	重忠、梶原景時の糾弾連署状に署名する。
	12.18	景時、鎌倉を追放される。翌年1月20日梶原一族討たれる。
建仁3年(1203)	9.2	比企一族討たれる。重忠、比企氏討伐軍に連なる。
元久元年(1204)	1.28	京都で重忠が執権北条時政を討ったとのうわさがひろまる。
	10.14	重忠の子・六郎重保、三代將軍実朝の御台所を迎えるため上洛する。
	11.4	重保、京都守護の平賀朝雅と口論する。
元久2年(1205)	1.14	重忠・重保父子の勘当が解ける。
	6.19	重忠、武蔵国菅谷館を出発し鎌倉へ向かう。
	6.22	<u>重保、三浦義村に由比ヶ浜で討たれる。重忠、二俣川で義時・時房率いる大軍に襲われ、重忠以下134名討死。</u>
	6.23	義時ら鎌倉に帰る。重忠の無実の死を悲しむ。
	閏7.19	時政・牧の方が追放される。22日、北条義時、執権となる。
承元4年(1210)	5.14	<u>重忠の未亡人、所領を安堵される。</u>

鎌倉街道

鎌倉街道は、全国各地の拠点と鎌倉を結ぶ中世の幹線道路である。このうち鎌倉街道上道は、鎌倉から武蔵国を縦断して上野国（群馬県）を経由し、信濃国（長野県）に通じる道である。鎌倉時代の記録から、おおよその経路を押さえることは可能である。

街道は、物資の輸送や人々の往来などの点で重要な役割を果たした。交通の要衝を抑えることが支配の足がかりとなるため、幹線道路の掌握が権力者の関心となり、このため上道沿いでは幾多の戦いが行われている。畠山重忠や新田義貞らの武士、日蓮などの僧侶が上道に足跡を遺している。



かなさなじんじや
○ 金鑽神社

● 金鑽神社 (説明版より)

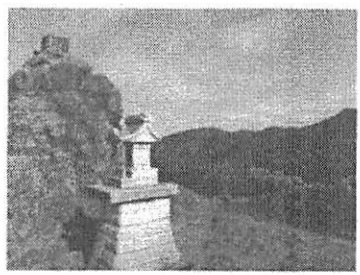
・金鑽神社は、旧官弊中社で、延喜式(平安時代中期の律令の施行細則) 神名帳にも名を残す古社である。むかしは武蔵国二の宮とも称された。地名の二の宮はこれによっている。

・社伝によれば、日本武尊が東征の帰途、伊勢神宮で叔母の倭姫命やまとひめのみことより賜った火打金を御霊代(御神体)として、この地の御室山(御岳山)に奉納し、天照大神と素盞鳴命を祀ったのが始まりとされている。

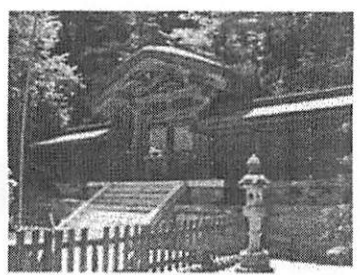
・鎌倉時代には、武蔵七党の一つ、児玉党の尊信が厚く、近郷二十二カ村の総鎮守として祀られていた。江戸時代には徳川幕府から御朱印三〇石を賜り、別当の一乗院(元三神社)とともに栄えた。

・境内には、国指定重要文化財の多宝塔や、平安時代の後期、源義家(八幡太郎)が奥州出兵のため戦勝祈願を当社にしたときのものという伝説の遺跡「駒つなぎ石」「旗掛杉」「義家橋」などがある。

・なお、この神社にはとくに本殿をおかず、背後の山全体御神体としていいる。旧官・国弊社の中で本殿がないのはこのほか、全国でも大神社(奈良県)と諏訪神社(長野県)だけである。



御神体山「御室ヶ嶽」の頂



奈良の大神神社、長野の諏訪大社同様、本殿がない。この中門の裏山(御神体山の「御室ヶ嶽」)が本殿

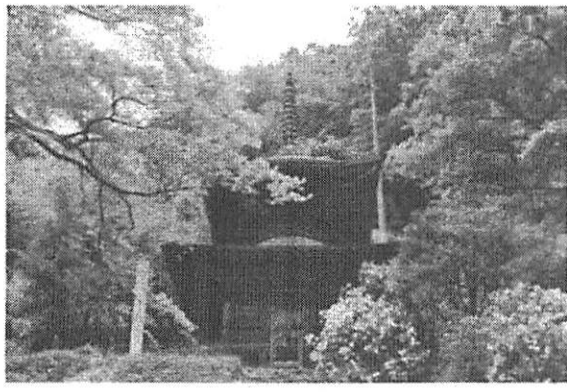
● 多宝塔 (国指定重要文化財)

・この多宝塔は、三間四間のこけら葺き、宝塔(円筒形の塔身)に腰屋根がつけられた二重の塔婆(卒塔婆)供養・報恩のため、仏舍利や遺物などを安置した建造物)である。

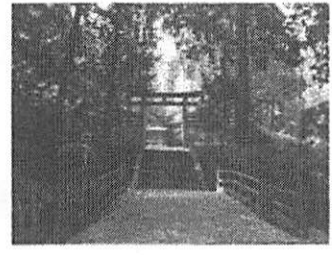
・天文三年(一五三四)に阿保郷の丹の荘しやうの豪族である阿保弾正全隆が寄進したもので、真柱に「天文三甲午八月晦日、大檀那阿保弾正全隆」の墨書銘がある。

・この塔は、建立年代の明確な埼玉県有数の古建築であるとともに、阿保氏に係る遺構であることも注目される。塔婆建築の少ない埼玉県としては貴重な建造物であり、国指定の文化財となっている。

多宝塔



特別天然記念物「鏡岩」
約1億年前、関東平野と関東山地にある八王子構造線ができたときの岩断層のすべり面という。断層がずれた際、強い摩擦によって岩が磨かれ、鏡のような状態になったという。



奥州「前九年の役」追討のとき、源義家(八幡太郎)この地に戦勝祈願の橋を架ける。

○ 元三大師 (金鑽大師 or 大光普照寺)

●大光普照寺 (説明版より)

元三大師と呼ばれるこの寺は、正式には金鑽山一乘院大光普照寺という天台宗別格本山の名刹であり、古くは聖徳太子の開創で舒明天皇の勅願寺であったと伝える。平安時代の初期、天台宗祖伝教大師最澄の弟子で、下野国出身の慈覚大師円仁の中興によって本尊に十一面観音が安置され、その別名によって寺号がつけられた。

その後、十八代天台座主である慈恵大師良源(元三大師)の留錫(滞在)により元三大師の寺として親しまれるようになった。

また、鎌倉時代になると川越喜多院から豪海という僧が来住し、僧侶養成の学問所を開設した。これが世にいう金鑽談所であり、江戸時代に上野に勧学講院ができると、その系列の八箇檀林の一寺として、多数の学徒を収容していた。

また、源義家、御嶽城主、鉢形北条氏、児玉党久米氏などの武将の信仰も厚く、後には徳川幕府から寺領三十石の御朱印を賜った。



本堂

現在の本堂は文化五年(一八〇八)の再建で、元三大師の信仰が盛んであったためか、中央に大師を安置する形となった。元三大師とは正月三日になくなられたので名付けられたという。当日は最大の縁日で参拝者が多く訪れる。

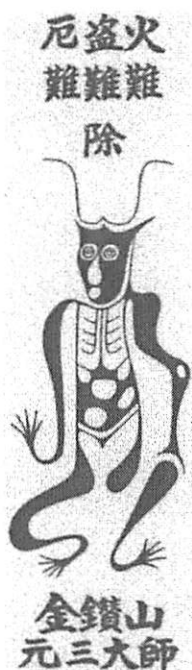
なお、明治維新の神仏分離令により、当山の奥の院「金鑽大明神」は武蔵二ノ宮金鑽神社として分立し、多宝塔も神社の所有となった。

●元三大師 (九一二〜九八五)

名を良源、諡号は慈恵大師、一般には元三大師。またの名を角大師。豆大師とも云い、中世以来、独特の信仰を集め、二十一世紀に至るまで「厄除け大師」などとして、民間の信仰を集めている。天台宗比叡山延暦寺の中興の祖。

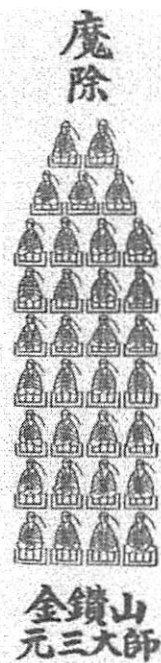
○角大師

護符(お守り札)の一つ。正月に門口に貼る「元三大師」と書いた札。良源が災疫を祓うために夜叉の姿に化して自らを鏡に映し、自分の像を置く所には必ず悪鬼・災疫はないと誓ったことに由来するという。角を生やした鬼の姿を描くところから角大師ともいう。



○豆大師

護符(お守り札)の一つ。紙に三十三体の豆粒のような大師像を表わした絵である。良源は(慈恵大師)は観音の化身と云われており、観音はあらゆる衆生を救うために三十三の姿に化身するという「法華経」の説に基づいて三十三の大師像をあらわしたものと云う。



参考資料

- ・「菅谷館跡」
 - ・「鉢形城指南」
 - ・鉢形城パンフ
 - ・埼玉県立川の博物館パンフ
 - ・畠山重忠辞典
 - ・「畠山重忠」
 - ・「鎌倉街道をゆく」
 - ・金鑽神社説明版
 - ・元三大師説明版
 - ・「埼玉県の歴史散歩」
 - ・仏教大辞典
- 県立嵐山史跡の博物館資料
鉢形城歴史観冊子
鉢形城歴史観
埼玉県立川の博物館
川本出土文化財管理センター
埼玉県嵐山史跡の博物館
埼玉県嵐山史跡の博物館
金鑽神社
元三大師
山川出版社
小学館